

けっこう エーこど いってゐるんですが

サトウ サンペイ



けっこう エーこど いってるんですが

サトウ サンペイ



文藝春秋

著者略歴

昭和4年名古屋に生まれ、大阪で育つ。昭和25年京都工業専門学校(現京都工芸繊維大)色染科を卒業、大丸デパート宣伝部に勤務。新聞広告制作のかたわら漫画を描き始め、昭和32年に同社を退職し漫画家として独立。昭和41年「アサカセ君」「フノ三太郎」で第12回文藝春秋漫画賞受賞。著書「トコカへ行こうよ」「スマートな日本人」 本名佐藤幸一。

けっこうエーこと
いってゐるんですが

昭和五十二年二月一日第一刷

著者 サトウサンペイ

発行者 阿部 亥太郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三番地
電話 東京(二六五) 一二二一

郵便番号 一〇二

印刷所 凸版印刷
製本所 加藤製本

・万一落丁などの場合はお取替えいたします

目次

イラッシャイ、イラッシャイ 7

女ども、よく聞けよ 12

うちの元日 16

メガネザルのジサマ 20

四十過ぎて「赤毛のアン」 25

村で買った小学生の絵具 29

寮歌なんて人前で歌うなよ 34

坊主になる気で推せんしろ 38

お茶やお花のセンセイになりたい 43

ユーモア大学 46

三角消防ホース 51

損すれば宇宙人になれるのか 55

希望と勇気と「サム・マナー」 60

金持ちにはなれないが…… 64

日本の役人を輸出せよ 69

美人というも皮のわざなり 73

心斎橋で逢いましょう 77

いいのかな、みんな洋式で 81

「南極の氷」作戦 84

腰かけて歯をみぐくと…… 88

ばくのイタセクスアリス 92

うなぎは大阪にかぎる 100

雨の音 105

俺はジェントルマンだア 109

遅刻の王様 114

すし屋なんかこわくない 118

富士山とセーター 122

女性よ、男を立ててくれ 127

結婚式、するアホーに見るアホー 130

女性は船のカジ、水面下にいよ 136

女の「けれども」 139

ペンテンさんと飲むお酒 142

男性をひきつけるコツ 145

新入社員に車のお迎え 149

商売は女性に向いている 155

鯨を食べる方法 158

金持ち風バリ一週間Ⅰ 162

金持ち風バリ一週間Ⅱ 165

金持ち風バリ一週間Ⅲ 168

毛皮裁判 172

「駅員さん、お早よう」の一言 176

初めまして、ガリバーさん 181

子よ、痛さは来てからでいいのだ 186

ぼくは「平和」を知っている 191

おしゃべりは女にモテない	195	幻のシャリアピン	222
英国のシップ・スクール	199	歩道のないクルマ文明	225
ぼくがベスト・ドレッサー？	203	歩行者学校	230
息子をたずねて三千里	206	浮気ぐらいなんですか	235
風呂敷は教養のシンボル	210	国会とダメな夫婦	241
英国人のエチケットについて	213	政治家はチップで暮らしている	244
私のアイ・ラブ・ユ―論	216	ニコニコ暮らすのじゃ	250
タイセツ博覧会	219		

けっこうエーこといつてるんですが

■イラッシャイ、イラッシャイ

大阪の京阪沿線に、たいへん学のあるジイサマが住んでいる。

その住居は三疊一間、ガードわきのオンボロ長屋の二階に間借りしていて、ヘンリー・ミラーや、ハックスレーや、老子や、モンテーニュや、良寛や、とにかく難しい本ばかり読んで暮らしている。

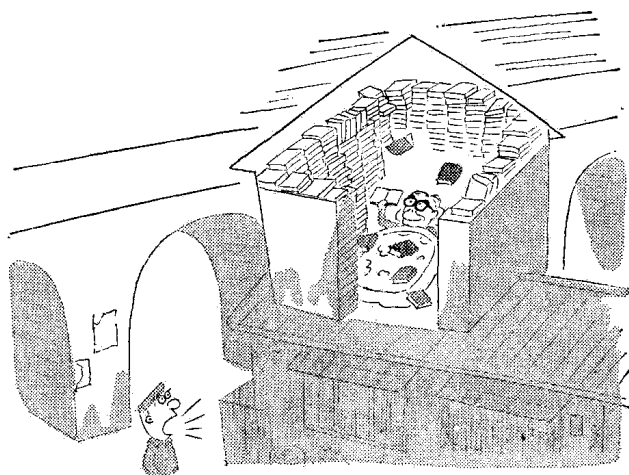
ひとり暮らしとはいえ、三疊一間だから、いくら売っても、人にやっても、すぐに本がうず高くつもり、ふとんを敷くと、まるで本の井戸

の中に寝ているようになる。もちろん、オンボロ長屋だから電車が通るたびに、本がバラバラ落っこちてくる。

髪はシルバークレイといたいところだが、あれは金持ちオジサンの専用語で、やはり貧乏オジサンには白髪まじりのハリネズミ・ヘアーというのが正しい。いつもメガネを鼻先にずり落とし、それでも外出するときは、キチンとネクタイをして、ちょっと大き目だが、きれいに磨いた靴をはき、ドタドタと前かがみに、しかし、かなり足早に歩く。

「メガネザルみたい」

うちの小学生の娘が初めてあったとき、そういったので、それからは、「メガネザルのジサマ」と呼ぶことになった。さすがオレの子、町の仙人にびったりの仇名だ。



このメガネザルのジサマが、ばくに手紙をくれる。月平均二、三通、それが十数年も続いているので、ミカン箱にいっぱいになってしまった。

難しい本ばかり読んでいるから、当然手紙も難しい。じっくり読めばスルメみたいに味が出てくるのだろうが、いつもはたいいてい、チラと読んで、ポイトみかん箱へ放り込んでしまう。きょうはその一通を引きずり出して、目の目を当ててみようと思う。読者の方もしばらくシンボウしてつきあってやってください。

サンベイさん、今日は。

今日は十二月二十四日、土曜日、しかもクリスマス・イヴ。

ヘンリー・ミラーは毎日が「土曜日の午後」

と思つて暮らし、ヘミングウェイは毎日が「移動祝祭日」と思つて暮らし、サンベイさんは、大丸時代に「毎日が日曜日」と思つて暮らし（筆者註・いや、サボリぐせのついたサラリーマンということ）、中国の大徳は「日日是好日」ともいつている。

街にはジングルベルの音楽が流れ、美しい女の子がきれいなリボンをクリスマスケーキにつけて家路を急ぐ（筆者註・そういう風景も喜びにみちみちていると、いいたいのだろう）。わが家に帰るとサンベイさんから小包が届いていた。

「物の貴きを知りて、その値いを知らず」とはいうものの、この下着は高かったに違いない（筆者註・バーゲン）。いやはや、心尽くしに身も心も温まる思いがしました。やはり、サンタ

クロースはどこかにいるんですね。

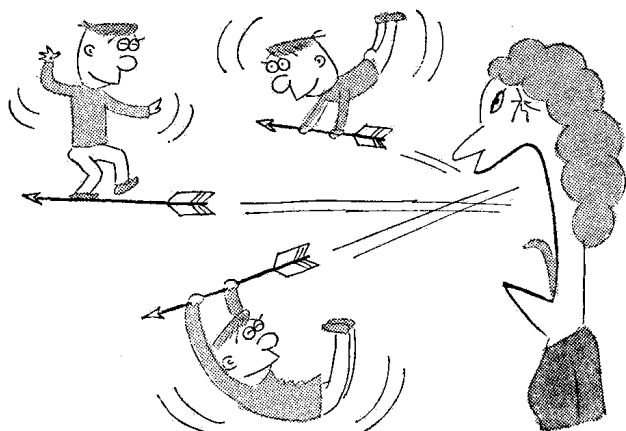
今日はいつかサンベイさんに問われたことについて、ちょっと書きます。

「人生はすべてよしの気持ちで生きよ」とか「イラッシャイ！ イラッシャイ！ の精神をもて」とか言うけれど、メガネザルのジサマには反抗とか、抵抗とかの精神はないのですか」
そのときぼくは、あまり弁明しなかったのですが、妙にあの時のことが心に残っているのです、ちょっと弁解しておきます。

それは楽しいことだけでなく、苦しいことや、損になることに対しても「イラッシャイ！」と快く迎えられるようになるという意味です。

そうなるまでには、僕も大いに反抗し、懷疑し、抵抗もしてきたものです。

「すべてよし」といえるのは、一度大いなる否



定を通ってからではないでしょうか。

苦悩に反撃を加えると、その苦悩はかえって大きくなりますから、苦悩をこちらから逆に歓迎してやり、苦悩に同化するようにすれば、苦悩が消えてゆくように思えます。

良寛さんが、

「災難に会う時節には災難に会うがよろしく候。死に会う時節には死に会うがよろしく候。これがこれ、災難をまのがれる妙法にて候」

といっているのも、苦難に抵抗するより、苦難に同化するほうが、苦難をのがれるアイデアだと説いているのではないのでしょうか。

悪魔がやってきても、こちらが抵抗したり、後を見せて逃げ出したりせず、却^{かえ}って、イラッシャイとばかりに歓迎の意を表し「いっしょに遊ぼう」と言ってやれば、悪魔のほうは、

「せっかく痛めつけてやろうと思ってやってきたのに、こいつ、おそれも逃げもせず、張り合いない奴だ。こんな奴を相手にするのはもうやめだ」

と、途方にくれてすぐご退散するかも知れません。

心のこもった温かい贈り物と、歳末ご多用中にもかかわらず、ご静聴くださいましたことに感謝します。

メガネザルのジサマより

きれいな女や、お金だけ「イラッシャイ、いっしょに遊ぼう」というのじゃいかんのだな。いやな仕事も、不景気も、災難も、女房のヒスにもたえるんだな。いや、たえるんじゃないくて、「いっしょに遊ぶ」んだな。

「あなたッ！ 夕べはダレと飲んだの！」

「ホー、イラッシャイおヒスさま。きょうのおヒスは、またよきおヒスで……」

ジサマの手紙はじっくり読めば漫画の勉強にもなるのだが。

■女ども、よく聞けよ

ことしのぼやきぞめは元日。

その前日の大晦日はどこへも行かずうちにおり、朝から机の整理などをする。この一年のつぐないもあって、女子小人への風当りもふだんの三倍ぐらいやわらかく心がけ、よきババウリを示した。オレだって仕事に追われてさえないなければ、こんなにも優しくおだやかな日が送れるんだということが、女子小人どもにもよく判ったことだろうと思う。

晩めしのあとは「紅白」、「ゆく年くる年」、

「年越しそば」とおきまりのコースをたどり、子どもも寝たことだから、こちらも寝ようと思ったところ、深夜テレビが始まった。これがなんと勝新太郎の『悪名』。ファンゆえ、ぜったいに見逃せなく、

「女房、お前も見えておけ、これぞ男の中の男一匹。これを見れば男、すなわち亭主のオレのこと、いくらか理解できるであろう」

とシマイゴトに立ち上がりかけた女房を引きとめた。

日頃、映画をいっしょに見にゆくようなこともないから、今夜は二人そろって映画見物をしようというのである。なんとやさしいババ心よ。

ところが映画が始まって、女房はなんだかソワソワと落ち着きがなく、コマーシャルの度に立ち上がり台所のほうへゆく。コマーシャル

が終ってもすぐ戻ってこないで、「オイもう始まつてるぞ」とイライラしながら声をかけると、ようやくやって来て続きを見る。そんなことをくり返しているうちに、いくら呼んでも帰って来なくなった。

映画なんてエものは初めの方を見逃したり、途中を抜かしたりしては、スジぐらいは見当がついても、映画のニュアンスは全然感じとれなくなってしまうものである。大げさにいえば映画は空間芸術であると同時に、きわめて緻密な時間芸術なのである。そう何度も席を立ったのでは製作者に対しても失礼ではないか。

いくらシマイゴトがあるにせよ、第一、けさは元日の朝ではないか。夫がきげんよく映画に誘ったのをどうして黙って喜んで見ることが出来るのか。これがつまらない映画なら立つの

もよからう。しかし、結構面白いではないか。夫がいっしょに見ようとしたそのやさしい心根がわからないのか。すべてを投げ打ってまで、今ごろシマイゴトをせねばならぬ理由がどこにあるのか。オレが大晦日からけさにかけて、こんなにおだやかに努めてきたのに、それに応えられないのか。

と、初めは心の中でつぶやいていたが、ついに緒が切れて、大声が外へ出てしまった。つまり、怒鳴り始めたのである。

「映画をみろったら、ちゃんとみやがれ!!」

女房はなぜ急に怒鳴られたのか、よくわからないらしく、キョトンとしている。その無神経さがいっそうこちらにはカンにさわり、

「みろったら、みやがれ!!」

とさらに声を張り上げる。狭い家のことだか

ら、どうせご近所には正月早々響き渡ったことであろう。女房もようやくぼくの理不尽な怒鳴り声に腹が立ち始めたらしく、ギアギアわめき、ぼくもその倍ぐらいの声でギアギアわめいた。ストーブの火照りも加わり、ぼくの頭はついに沸とう点に達し、

「シマイゴトシマイゴトってなんだ！ シマイゴトぐらいオレがやってやる!!」

といってしまう、意地も手伝って元日早々、大晦日の晩に食いちらかした食器類のシマイゴトをする破目になった。

シマイゴトをしてみると、何年か前、世間を騒がせた食器洗い機のことなどがチラと思い起こされて、二、三考えるところもあったが、それは省略する。

ぼくの後ろに立って「もういいわ、私がやる

から」と女房が止めるのを「うるさい！ だまれ！」とはねつけ、全部やってしまい、口もきかず寝ようと思ったが、どうしてもいいたいことがひとつあったので、それをいつから寝た。

「映画監督で有名なKさんという人がな、新婚旅行で汽車から見えた富士山を指さして『きょうの富士はきれいだね』と隣りの花嫁にいったら、窓の方もろくに見ないで『そうですか』と返事をしたんだそうだ。Kさんはそれがカチンときてそのまま東京へ引返し、離婚をしてしまったそうだ。芸術家のKさんにはそのようなさっけない答えしか出来ない女とは一生暮らせないと思ったのだろう。夫に『富士山がきれいだね』といわれたら『まあ！ ほんとにきれいな富士のヤマッ！』といっしょになって喜ぶぐら